
一条探偵事務所へようこそ！

kurobuchi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一条探偵事務所へようこそ！

【Nコード】

N3465Z

【作者名】

k u r o b u c h i

【あらすじ】

高野龍弥は、いつまでも続く日常に、若干の退屈を覚える高校二年生。そんな彼は、始業式の日。とある少女の悪口を、本人がいると知らずに言ってしまう。

「だれが電波女ですって？」

小さいけれど、その鋭い視線は虎をも殺しそうな少女。一条優花。彼女との出会いが、龍弥の高校生活を波乱の非日常へと変える！
小さな探偵と、平凡な助手が繰り広げる。黒淵メガネの処女作！

どうぞ、寛大な目で見てやってください。
それでは、はじまります。

第一話 出会い

「まったく……」

暴力のように眠気を吹き飛ばす目覚ましを黙らせて、数分が経った。未だに眠気は俺の頭の六割の機能を奪い、俺は欠伸をして、その眠気を体外へ吐き出す。

部屋のカレンダーに目をやり、これから始まる日常にため息をつく。

「せっかくの休みも終わって、これからまた学校か」

そんなことをぼやきながら、俺こと高野龍弥は部屋を出て、それからリビングへと向かった。いつものように、テレビのスイッチを押して、テレビを見ながらパンを取り出す。すると、俺の注目を集めるニュースが飛び込んだ。

『昨夜十時頃、××県岡崎市岡崎町で、男子高校生が殺害されるという事件が発生しました。この男子高校生は――』

岡崎って、俺が住んでいるところじゃん。俺はパンをトースターに入れながら軽く考えた。

「警察は、この事件を岡崎市、高校生連続殺人事件の四人目の被害者として捜査を進める方針だということですよ……」

嫌な事件だ。さっさと解決してほしい。俺は焼けたパンにバターを塗りながら思った。

食事といっても、食パンと牛乳の簡単コンボを五分でほおぼり、俺は身支度を整えた。

俺の家には現在、俺以外の家族は住んでいない。両親は海外に本社を置く企業に勤めており、現在はヨーロッパの何処かにいるはずだ。別に、両親がいなくても、別段困ったことも無いし、隣の家がいろいろと面倒を見てくれているので、そういった不自由さを感じたことはない。

――ピンポン。

ほら、噂をすれば、お隣さんのお節介がやって来た。

「おーい、リュウ！ 朝だぞ、起きてるか」

玄関から、何とも平坦な日本語が聞こえてきた。俺は洗面所へと向かって、歯を磨きながら、その声に返事をする。

「ああ。歯を磨いたら行くから、待っててくれ、恵里香」

「はいほーい。んじゃ、燕が来るまで待ってるよ」

玄関の声は、そう言い返してきた。俺は、その返事を聞いてから口を濯ぎ、タオルで口を拭いて、彼女が待っている玄関へと赴いた。「よう。今日も朝からトレーニングか？」

俺は下駄箱に置いてあったスニーカーを履きながら、目の前の少女に言った。

「そうだぞ。お陰で、この季節なのに汗だくでさ。親父殿も手加減してくれないし」

そんなことを言いながら、玄関で飲料水を飲んでいるのは、幼馴染の宮藤恵里香だ。

小学校になってこの岡崎市にやってきた恵里香は、日本人とフィリピン人のハーフである。そのせいもあってか、日本では、まずお目にかかれないような綺麗な亜麻色の髪を、ストレートに背中まで流していて、その髪は最早、芸術品のような美しさを持っている。身長は一六〇程で、北欧出身だからか、肌も雪のように白い。

「刑事になる為の一環だろ？ 確か、柔道か剣道のどっちかができないとダメなんだよな」

「そーなんだよ。撃って守れるだけじゃ、けーさつにはなれないんだよ」

「なんだか、それだけ聞いてると野球選手みたいだな」

ちなみに、彼女の祖父は警視総監。父は有名な刑事という、ばりばりの警察一家なのだ。そのせいもあってか、自然と恵里香も、祖父や父と同じ警察の道を歩んでいくつもりらしい。その夢は、恵里香の小学校からの夢だった。

「野球選手と一緒にすんな。ってか、どうしてリュウは警察目指さ

ないんだ？ 男なら燕みたく警察か消防士を目指したほうがいいぞ？」

靴を履き終えた俺は、恵里香と共に玄関へと出た。朝の眩しい日差しが、俺と恵里香を出迎えてくれる。

「どうしてって、恵里香。お前なら分かるだろ？ 俺は、そんな柄じゃない」

「まあ、守られてばかりだからな。でも、厄介事持ちこんでくるワタシが言えた事じゃないけどさ、もう少し頼りになってくれると、ワタシは嬉しいんだけど」

「いや、お前の関わる事件で頼りになる奴は、絶対常人じゃねえよ」
まあ、恵里香が持ってくる厄介事は、高確率で危険だ。数日前も、恵里香のせいで強盗事件に巻き込まれたところだ。正直、俺は生きていた気がしなかった。

「まあ、そういった経験が、後々の人生で役に立つのさ」
「できれば、そんな経験が生かされない職場で働いていきたいものだ」

玄関を出る前に、そんなことを恵里香と喋った。でも、今思えば、これが俺の最後の日常となるのだとは、この時の俺は知る由もなかった。

岡崎高校は、俺の通っている学校の名前だ。県下でも有数の進学校であり、生徒数六百人という結構大きい学校だ。

県庁所在地である岡崎市にある岡崎駅から徒歩一〇分という近場にあるおかげで、電車通学の生徒にも優しい学校である。だが唯一の難点は、学校が急な坂道に建っているということだ。

岡崎市は、海と山に挟まれた都市だ。山がすぐそこまで迫っている。市自体は非常に長細くなっている。昔から中国やオランダとの貿易が盛んで、異国の里とも呼ばれていた。岡崎市の後ろに聳える山は、八坂山と呼ばれ、その向こうにある街が境市、その

向こうにある盆地が時雨市となっている。

俺達の学校は、その八坂山の麓に建っている。その為、えらく急な坂の真ん中に建設されているのだ。その坂は、第一回生達が破顔坂と呼んで以来、それが正式名称となってしまったそうだ。まあ、登ってみると分かるが、これは心臓破りの坂ってレベルじゃない。本当に顔が破壊されてしまいそうだ。

「あ、暑い——。久々に登ったから汗だくだ」

「なんだよ、あの程度でへばって。これだからリュウは」

「毎日あの坂をランニングコースにしている奴は大丈夫そうだな」

俺は、皮肉げに恵里香に言った。そんな俺達は、破顔坂を無事登り切り、各教室に貼られていたクラス分けの貼りだしを見つめていた。

「俺は三組か。恵里香は？」

「愚問だな、リュウ。リュウが三組ということは、ワタシも必然的に三組だ」

恵里香がどや顔で指差す先には、彼女の名前が記されてあった。

二年三組 宮藤恵里香。

俺と恵里香は文系なので、同じクラスなのだ。

「これで二年連続だな」

「だな。中学を含めると五年連続だぞ」

そう、俺と恵里香は、中学時代からずっと同じ時クラスなのだ。

この調子だと来年もきつと同じクラスだろう。別に、ここまでくると驚かない。

暇になった俺は、教室に入らずに、そのまま教室前のクラス表の貼りだしを眺めていた。男子はあらかじめ見終わったので、てきとーに女子の名簿を眺めていた。

そんなとき、ある名前が俺の目に止まった。

「一条——優花」

特に意識はしなかった。一条って名字も、優花って名前も、特別目立つ名前ではない。けど、なぜか分からないが、俺はその名前を

ぼそつと呟いてしまった。

「ん？　もしかしてリュウ。一条さんに目を付けていたのか？　リュウも、見た目だけなら女を見る目があるな」

さっきの独り事を聞いていたのか。俺の隣から、ひょっこりと現れた恵里香が言った。

「いや、別に知らない人の名前だ。その一条さんって、そんなにモテるのか？」

暇つぶしついでに、俺は恵里香の話に返事をした。すると、恵里香は神妙な顔をして貼りだしを見つめる。

「ああ。ルックスだけなら校内屈指だと言ってもいい」「ルックスだけなら？」

そう俺が返すと、恵里香が苦笑いで言ってくれた。

「いろいろ変なウワサがあるんだよ。実はヤクザ平山組のご令嬢だとか、一人暮らししているのは家族に殺されそうになったからだとか」

「かなりハードな噂だな」

もし噂が本当だったら、かなり危ないやつじゃないか。

「それにさ、そんなウワサが広まるようなことを、一条さんはやってきてるんだよ。理科室で怪しげな液体を混ぜ合わしたり、授業中に原稿用紙を広げて小説書いたり。『何やってんの？』って、聞くと、いつも『偉大なことをする』って返ってくるらしいし」

なんだよそれ。変つーか、最早電波女じゃねーか。

こんな進学校にもいるんだな。頭のネジが外れた変人が。

「……つまり、一条優花ってのは、馬鹿でアホな電波女ってことなん——って、どうした？」

俺が恵里香を見ると、恵里香は、まるで狼と視線の合った野兎のような顔で、俺に視線で『リュウ！　後ろ後ろ！』と訴えかけていた。

——一体、どうしたんだ？

「もしかして、後ろに狼でもいるの——」

か？ 冗談めかしながら、俺は恵里香の言う通りに後ろを向いた。

「誰が電波女ですって？」

そして同時に、全身の血の気がサーッと引いていくのが分かった。岡崎高校指定の黒に近い紺のブレザーに、黒く透き通った瞳を持つ三角眼。高校二年にしては低すぎる背丈に、腰まで届く綺麗な漆黒の黒髪を靡かせている少女だった。

正直な感想は、とても美人だということだ。大和撫子、とはこういう娘を言うんだとも思ったさ。けど、俺の頭はそんなことより危機的状况にあることを必死に訴えていた。

「ま、まさか——一条さん？」

おそろおそろ俺は聞いた。すると、彼女はこめかみのあたりをヒクヒクさせながら怒りを抑えて言った。

「ええ、いかにも私が一条優花よ。自分のクラスの教室に入ろうとしてたら、私の悪口を言ってる男子生徒を見つけたの。あなたなら、一体どうします？」

後半のセリフは優しさを含んでいるようにも聞こえたが、俺は理解している。間違いなく、そんな生やさしい物じゃないと。

まさに被告人と裁判長だ。

「あ、あははは。き、kkkk気のせいじゃないかなあ」

俺も、なんとか自分の無実を訴えた。しかし、どう見てもごまかし切れていない。

そもそも、相手は俺が悪口を言っていたところを目撃しているのだ。そんな現行犯である俺が、何を言っても言い訳にしかない。

恵里香に助けを求める視線を送ったが、恵里香は首を横に振った。

……仕方ない、謝ろう。そう心に決めた。しかし、

「……そう、気のせいなのね。分かったわ、邪魔して悪かったわね」と言っ

てきた。あまりの緊張で聞こえていなかった辺りの喧噪が、やっと耳に入ってきた。

な、何でか分からないけど、助かった。……と、思ったその時。

「そんなワケあるかあああ!!」

急に声が聞こえたかと思うと、助走をつけて俺に向かって走り出し、小さい影は、俺の腹に向かって唐突な蹴りを見舞った。

「ぐはぁ!」

俺以外の近くの生徒は、悲痛な俺の声に驚き、足を止める。

鳩尾に、ねじ込まれるような一撃がクリティカルヒットした俺は、無惨に倒れた。

なんつーノリ突っ込みだ!

「フン、馬鹿じゃないの! 聞こえてないと思ったの? あんたバカなの? 死ぬの? ならここで死んどきなさい!!」

罵倒のフルコースを並べて(バカ二回、死ぬ二回)一条優花は今度こそ教室に入っていた。なんだか、踵を返した時に靡く黒髪とか無駄に優雅だった。

俺は体を丸めて痛みに耐えていた。半端ないぞ、これは女子高生の蹴りじゃない。少し前にも恵里香のせいで強盗に蹴られたが、もしかしたら、あの時の強盗以上の威力だぞ。

死にはしないが、死ぬほど痛い。そして、俺を見る他の生徒たちの目も痛かった。

「えっと、大丈夫か?」

そんな中、恵里香だけが俺に慰めの言葉をかけてくれた。

第二話 作るのよ！（前書き）

（・・ω・・）↑こいつは、シーンが変わる時にお邪魔します。

第二話 作るのよ!

その後、俺は始業式直前まで必死に一条の一撃に耐えていた。鳩尾を優しく右手で押さる様子は、腹痛か妊婦のそれを思わせる。そんな痛みの中始業式へと赴き、ようやく痛みが収まってきたのは、始業式後のことだった。

教室に返ってきた俺は、その出来事を、中学時代の悪友に話した。すると……、

「あははは！ それで一条に蹴られたってか？ 傑作だな」

このように、見たとおり顎が外れん勢いで笑われた。そんな彼の名は近衛燕。髪を校則ギリギリまで茶色に染めている、いかにも今時な高校生である。しかも、美形という長所がある。この顔が作り出す笑顔が、今までどれだけの女性を虜にしてきたのだろうか。まったく恨めしい。

「うるさい、燕。はあ。朝っぱらから不幸だ」

俺は肩を落とした。大げさなため息に、蹴られた鳩尾が痛みを訴える。

「なあ工藤、一条について何か知っているか？」

俺は後ろの席の少年に問いかけた。するとその少年は眼鏡をくいと上げながら答える。

「そうだな。2年の最高成績者で容姿端麗、成績優秀、文武両道の完璧な人だけど、裏では変人と呼ばれても申し分ない事をしている

らしいぞ。まあ、話自体には結構尾ひれがついてるみたいだけどな」

工藤というのは、眼鏡をかけているこの少年。本名は工藤祐介、学年の中でも五番以内には必ずいる学力五四万の化け物だ。

しかし、工藤の話を聞いても、一条が一体どんなことをして変人呼ばわりされているのかは分からなかった。恵里香から聞いた限りじや、理科室で一人怪しげな実験をしたり、授業中に小説書いたりしているらしいことは聞いたけど……。しかし、この時点でも大分おかしなやつではあるんだが。

もう少し、彼女について聞きたかった。

「多少の尾ひれは仕方ないだろ。で、実際一条が、どんなことをしたのか聞か——」

「失礼するわよ」

——せてくれ。そう言おうとしたところで、俺は聞こえてきた少女の声に、目を丸くして言葉を失った。思わず振り返る。

「「「……………」」」

沈黙する俺たち。

そう、どういう経緯でこうなったのか、俺にも全然わからないのだが、何故だか知らないが、紛れもない一条優花本人が俺達の会話に割って入ってきたのだ。

「…………ちよつと、あんた達」

鋭い視線で俺達三人を見下げる一条。その視線が物語るのは、今朝の報復の続きか。

「「「……………」」」」

気まずい空気が流れる。こういう空気は突破するのが難しい。今までの自分の勘が言う。

だが、その沈黙を破ったのが、紛れもない一条だった。

「あんた。ちょっと来なさい」

一条は俺に指を指すなり、いきなり俺の腕をぐいぐいと引っ張ってきた。

「お、おい！ 何するんだよ」

ビックリした俺は、一条の手を振り解いて問いかける。すると、鋭い三白眼が、俺の事を睨んできた。

「いいから来なさい！」

そんな俺の質問は、一条の鋭い目つきでバツサリと切り捨てられた。鋭い一括。この一言でどんな猛獣すらもただの子猫に成り下がりかねん勢이었다。

従うしかないよな……。

そして、俺は考えるのを止めた。

(・ω・)

ここは屋上。岡崎高校で最も高い北館の校舎である。

この岡崎高校は、破顔坂と呼ばれる傾斜のキツイ坂の途中に建っており、北側に位置する北館は、南側にある南館よりも若干高い。そ

の北館の屋上から見える景色は、岡崎市の市街地を一望でき、生徒の間では密かなスポットにもなっている。

しかし、今はホームルーム中だ。だから、この屋上に人の姿はなかった。

俺は、引っ張られた袖を元に戻す。その間も、一条は優雅に屋上から桜を見ていた。

春の屋上は、学校の校庭の桜が綺麗に見えるのだ。

「おい、一体何の用だ？ ホームルームも始まってるんだぞ？」

俺の数歩先にいる一条に問いかける。すると、一条はふり返らずに、視線を校門の桜から空へと移す。

「あんた、人に悪口言つといてよくその相手と会話しようなんて思うわね」

ぐっ、やはり根に持っているのか。

まあ、そりゃそうだ。悪いのは俺なんだから。けど、だからって、呼び出しておいて話しかけるな、はないだろ。しかし、俺が悪いのもまた事実だ。

「確かに、あれは俺が悪かった。謝るよ……」

俺は素直に頭を下げようとした。

「いいわ。あんたの土下座なんて見ても目覚めが悪いし……」

土下座までするなんて言っていない。でも、それは頭をさげるなっということか？

一条は振り返って俺を見てきた。俺も一条を見返した。やはり、今

見ても一条は綺麗だった。洋服より、着物の似合いそうな撫で肩。白魚のような指。桜の花びらのような唇。

性格はアレだって恵里香は言ってたけど、本当に見た目は完璧だな。

そんなことを考えていると、一条は付け加えるように呟いた。

「その代わり、やって欲しいことがあるの、龍弥」

は？ 今、こいつ俺の名前を……。

「や、やって欲しいことって？」

「そう、あんたと私で」

「なんだ、ある程度のことだったら相談には乗るぞ」

俺は取りあえず一条に聞いた。なんでこの時、こんな事を口にしてしまったのだろうか。今思えば、これがそもその始まりだったのだろう。

優花はふり返って両手を広げて言った。

春風が吹き荒れた。校庭の桜の花びらが、この辺りまで風に運ばれて踊っている。

そして今、まさにこの瞬間に俺の最後にして最強の不幸と、壮絶な非日常のドタバタ学園生活の幕が開けたのだった。

「探偵事務所を作るのよ！」

そう一条優花は高らかに宣言した。

第三話 一条優花と高野龍弥（前書き）

少し長いです。

第三話 一条優花と高野龍弥

ここは下駄箱の前である。

HRも無事終了し、始業式のための一日は終わりを告げていた。俺は工藤、燕とゲーセンに行く約束をしていたのだが、今のこの状況に、俺は持っていた上靴を落とし、玄関の方を見て、まるで全身を瞬間接着剤で固められたような心情で固まっていた。燕も工藤も、あんぐりと口を開けて固まっている。

「遅かったじゃない」

そこにいたのは、髪をかき上げて「ふん」と声をならして立っている一条優花だった。

「まったく、なにやってんの？ さっさと帰るわよ」

俺は残った理性を総動員させて、この現状に対しての最善の解決策を出すべく、瞬時に考える。そして、まもなく解決策を導き出した。この結果が——これだっ！

「あ、そ、そうだな、帰るか一条」

そう、力ある者には逆らわない。もっとも安全な作戦だ。でも、情けなさも倍増しである。まさに諸刃の剣？ って感じた。落とした上靴を拾い上げ、下駄箱に戻す。そして、すまないとお詫びを述べる。一条は、「まあ、いいわ」と、不機嫌そうに腰に手を当てて頷いた。

「龍弥 ああああ！ ちょっと待てえええええ！」

「な、なんだ？ つば——」

「どういう事だ！ お前HRサボってまさかあの一条とラブラブなんて俺は認めねーぞ！」

「な、何言ってるんだ！ これは……」

そう言おうとした時、俺の目の前を何かがものすごい勢いで通り過ぎた。

「うおっ!？」

それは燕の顔面へとクリティカルヒットした。その何かは、燕の顔へめりめりとめり込んでいき、勢いを失って地面へと落ちる。

「ぐはぁ！」

鞆……だよな？ 今の。あんなに重々しく顔にめり込むなんて、一体どんな速度で投げたんだよ。

「ば、馬鹿なことやってんじゃないわよ！ 鞆投げるわよ！」

一条は、顔を真っ赤にして言った。だが一条、お前は鞆を投げる前に、そのセリフを言うべきだったと思うぞ。

「で、俺たちとの約束はどうするんだ？ 龍弥」

燕の亡骸を完璧に無視して、工藤は冷静に俺に問いかけた。俺はどうしようか迷って一条の方を見る。すると、先ほどから一条は来なかったら殺す、というコンタクトを一方的に送ってきている。どうやら俺には拒否権はないらしい。

「ご、ごめん。二人とも、今日は一条と帰るわ。ごめんな、また明日」

「そっか。何脅されたか知らないけど、がんばれよ」

「ああ、がんばるよ」

でも、一体何をがんばればいいんだよ、俺は。実際、どうして俺が一条と一緒に帰らなくては行けないのか、正直分からなかった。俺は、そそくさと昇降口を降りていく一条を追いかける形で歩いた。そして、綺麗な桜と校門を抜けて、破顔坂を下り始める。

「で、一体何の用だ。一条」

もう他人には聞かれないだろうと思った俺は、鞆を肩に担いで、一条に問いかけた。

俺に問いかけられた一条は、不機嫌そうな、心底鬱陶しそうな顔で返してきた。

「あんた忘れたの？ 言ったでしょ？ 探偵事務所を作るって」

「あれって、本気だったのか!？」

「そうよ。何か文句でもある？」

文句どころか、そもそも作る理由が分からない。

「いや、だから何のためにそんなもの作るんだ？」

俺がそう言うと、一条は俺から目線を変えて空を見て、そっと呟いた。

「偉大な事を成し遂げるためよ……」

さも当然のように、一条は言い切った。だが、俺はそれが全ての人に自分の行動を聞かれたときに対する空返事のようなものだということ、恵里香から聞いている。

つまり、教える気はないってことだ。

「理由は分かった。だが、何故俺を選んだんだ？ 他にも友達ぐらいいるだろ？」

「いいの。あんたに決めたんだから」

速攻で言い返された。そういえば、一条の噂はよく知らないけど、そこまで出回っているって事は、友達って呼べる人も少ないのかも……。

「で、他にメンバーはいるのか？」

「ああ、それなら……」

一条はちらつと喫茶店を見ると、指を指して俺に言った。気が付けば、破顔坂の麓にある喫茶店のところまで降りてきていたようだった。

「入りましょ？」

と言って喫茶店へと向かっていく。
やれやれ、付き合うしかないのか。

俺は諦めのため息をつき、店に入った。

店内は広くもなく狭くもない何処にでもありそうな喫茶店だった。別にレトロってわけでも、真新しいとも言えない喫茶店。そこに、俺と一条は入った。

「んで、メンバーは、俺と一条以外どうなっているんだ？」

俺は店員に言われた席に移動しながら一条に聞いた。一条は、席に着き、肘を着いて一言。

「うん、決まってないわ」

いや、決まってないって。

「おい、どうするんだよ。何も決まってないなら手伝えないぞ」
「いいじゃない、それともあのまま殺しておけば良かった？」

いや、だからあれは確かに俺のせいだけど。

「わ、悪かったって」

本当に申し訳ない。

「っていうか、何度も聞くけど、どうして俺が選ばれたんだ？」
俺は店員にコーヒーを頼んでから、一条に向き直る。

「いいでしょ！ あんたに決めたって言っているんだから！」

水の入ったコップを一条は思い切り叩き付ける。零れた水が、コップの周りに飛び散った。しかし、すぐにおしぼりで拭くあたり、一条は元々礼儀正しい子のようにだ。

「そんなポケモンみたいな決められかたされてもな」

あくまで、俺は冷静に返す。

「第一、まだお互いの事も十分知らないだろ？」

そう、そもそも俺達は会って半日経つか経たないかだ。まだお互いに知らないことが多い。あっちはどうか知らないが、少なくとも俺は一条の名前以外は知りもしない。

そう言うと、一条は腕を組んで考え込む。そんな姿も結構知的な雰囲気をかもちだしていて、一瞬見とれてしまった。だが、すぐに

答えがまとまったのか、腕組みを解いて一条は口を開いた。

「一条優花。一六歳」

以上、自己紹介終わり。って、言いたげな表情で言われても……。

「いや、二つとも知っているんだが……」

俺のその言葉に、一条の顔が蒼白になる。

「な、何で知っているのよ！ まさかあんた——私の事、隅の隅まで調べ尽くしたっていうの!？」

「なんでそうなるんだよ！ 名前はクラス名簿に書いてあったし、同じ学年なんだから同じ年だろ!!」

「……………」

「——それもそうね」

「遅えよ!」

今気付いたのかよ!

「で、あんたは？」

一条は腕を組んで俺を見る。

「お、俺か？ 俺は高野龍弥。お前と同じ年だ」

一条と同じように、名前と歳を名乗る俺。

「……………」

「えっ？ 終わり？」

素っ頓狂な声を上げる一条。

「なんだ？ どうかしたか？」

俺はそう言って、店員の持ってきたコーヒーに口を付ける。

「いやいや、あんたの名前も歳も知っているわよ」

「お前だって、それだけしか名乗ってないだろ？　なのにこっちは喋るワケない」

そう言うのと、一条はしぶしぶ頷く。

「そうね、なら……どんなことを言えればいいの？」

「どんなつて、そりゃ好きな食べ物とか、好きな事とか、家族構成

――」

「――っ……」

家族構成、その単語を聞いた途端、一条の顔が曇った。どうやら触れてはいけない琴線に触れてしまったみたいだ。

まあ、聞くことはそれだけじゃないし、無理に聞く必要もないだろう。

「家族構成はいい。俺自体言いたくないしな」

その言葉を聞いて、一条は少し安堵したようだ。どうやら、お互いに家族に関してはタブーがあるみたいだ。無理に聞くのも、そのせいで無理に問いただされるのもご免だ。

「そう――わかったわ」

取りあえず、俺は家族構成の件についてはこれ以上考えるのはやめておいた。それはさておき、一条は俺に一つ確認をしてくる。

「ねえ、私が言ったら、あんたも私と同じ問いについて答えてくれるのよね？」

「ん？ まあ、並大抵のことなら答えるよ」

さて、一条優花というのがどんな人物か、いろいろツツコミながら聞いてみるとするか。

「それじゃあ、改めて自己紹介をするわ。私の名前は一条優花。一六歳よ。身長も体重も言わないわ」

「ぱっと見て、身長は一四〇後半だな」

「うるさいわよ！」

ま、見ての通り身長についてはタブー、と。ま、体重については女子だし当然だけど、いくら何でもタブーまみれじゃなか？ 結局、未だに名前と歳以外は謎なままだぞ。

「さっきの続きからいくわよ。で、身長体重は言わないわ。女性の口からそんな事は言えないから。

で、好きな食べ物はおムライスよ」

「うわっ、子供っぽいな」

「いちいち口挟むなあああ！！」

人の目も気にせず、一条は立ち上がって大声で怒鳴る。少ししてから、自分でもはしたないと後から思ったのか、急に大人しくなつて一条は静かに小さく席に座る。

「悪い。冗談だよ、冗談。オムライスか……昼飯や晩飯の定番だな」
いや、俺の家だけかもしれないけど、俺は滅多にオムライスなんか作ったりしない。

「まあ、いいわ。こういう場合は、私が一步大人になってあげなきゃ」

「はいはい」

適当に流しておく。だって、相手にすると怒るし。でも、何故だろうか。流してやっても一条の機嫌は悪かった。むしろ、さっきよ

り怒ってる。どうしてだよ。

「嫌いな食べ物は、ピーマン、豌豆、カボチャ、キャベツよ。得意なことは、勉強全般、体育、つまり学校の教科全部ね」

は、初めて見たぞ。堂々と得意なことで勉強って言うヤツ。しかも全教科ときたか。

でも、そう言って文武両道っぷりをアピールした後だからか、何故か嫌いな食べ物の存在感がハンパない。ピーマンとか納豆って、小学生か、お前は。

「へ、へへ、すごいんだな一条は」

俺がそう言うと、一条は、えへんとふんぞり返る。いろいろと言いたいことはあったが、これは言わない方が無難だろう。

「じゃ、次はあんたが自己紹介しなさい」

一条が俺に向かって指を指す。人に指さしちゃいけません。

「えっと、高野龍弥だ。お前と同じ年で、身長は一七〇。体重は正直言って平均的だ。好きな食べ物は特になहीं。強いて言うならクリームシチューだな。嫌いな食べ物も特になहीं。得意なことは、シューティングゲームだ」

「さて、自己紹介もこれくらいにして、話を戻すわよ」

「おい！ ノーリアクションかよ！」

「はいはい。よかったわよー。とっても普通で」

「なんだか全然嬉しくない言葉だなあ！」

確かに、我ながら普通過ぎる紹介だと思ったけどさあ。

「さて、閑話休題」

一条は、こほんと咳払いを一つ。

「話が逸れたけど、人員が足りないからあんたのほうで集めてくれない？」

「なんだよ、自分で言っというてメンバー集めは俺の役目かよ。いい加減だな」

「いいでしょ！ 私はそういうの苦手なんだから！」

「苦手？」

「……あ」

苦手って、つまりは人見知りか何かか。一条は、しまった！ と言わんばかりに動揺しているが、これは弱みを握るチャンスだ。まあ、今後のために覚えておくか。

「一条優花は人見し——」

「そ、それよりあなた、家はどこ？」

俺のコーヒー代を机に思い切り叩き付けて、一条は俺の声をかき消そうとする。

「どこって、ここから街の方へ少し行っただくらいかな？ って、いうか何でそんなこと聞いてくるんだよ」

俺は一条の代金をサイフに入れようと小銭を集める。

「今からあんたん家に行くからに決まっているでしょ？」

俺の持っていた小銭が、ものすごい勢いで吹き飛んで当たりに四散した。

豪快に小銭をぶちまけ、俺は小銭を拾うことすら眼中にはなく、目を見開いたまま硬直する。

いや、よくよく考えると聞き間違いだったりするかもしれない。ここはもう一度彼女に聞いてみようと思った。

「な、何て言った？ 今」

「だから、あんたの家に行くって言ったでしょ！ 聞こえなかったの？」

まてまて！ 話の内容が全く読めないぞ。なんで一条を家に案内しなくちゃいかんのだ。

「いや、だからどうして家に一条を招かなくちゃいけないんだよ」

「いいでしょ？ 別に困るわけでもないのにグチグチと、本当に意気地なしね！」

いいや、俺は普通の対応をしているだけであって決して意気地なしではない気が。ってか、普通知り合って一日と経ってないやつを家に入れるか？ 普通。

そう内心で反論していると、一条の顔がまたもや蒼白になり、両腕で胸の辺りをさっと隠した。まるで、自分の貞操の危機を回避せんと言わんばかりに。

「もしかして私に変なことを期待しているの？ 馬鹿も休み休みにしないと死ぬわよ」
していない。

「するわけないだろうが」

「しなさいよ！ 私だって女の子なのよ！ ちょっとくらい興味持ってくれてもいいじゃない！」
どっちだよ！

「ど、どのみち知り合ったばかりの女の子を家になんか連れて――」
「もう！ なんでもいいから私を連れてけー！」

一条が思いつきり叫んだ。おいおい、客が思いつきりこつちを見てるぞ！ 恥ずかしいからやめてくれ！

しかし、このまま抗議しても一条は下がる気はないようだ。……仕方ない。俺は大きなため息をつき、覚悟を決めた。

「……分かった、来たいならついてこい」

「うん。分かればよろしい」

「ご機嫌が良さそうな事で。」

第四話 少年は、少女の姿に過去を見る

「ここがあんたの家ね。想像していたのよりずっと立派じゃない」

一条が驚きの声を上げる。いや、そんなところに声を上げられたって褒められた気がしないんだが。

駅まで続く国道から県道へ入る。そして、そのまま住宅街へと進入すると、一番手前に建っている家が、俺の家だ。

三階建ての我が家。庭は平均的な広さで、手入れもされていない木が数本植えられている。門扉があり、その隣には黒いシャッターの付いた大きな車の車庫がある。しかし、そこに車はない。両親が帰ってくるときにだけ、そこは使用されるからだ。

「で、来た時点でもう夕方の六時だぞ？俺の家が分かったんだから、もういいだろ？家族も心配するだろうし」

俺は、あからさまに疲れた声を出して言う。無理もないだろう。あの後、なんだかんだ言って一条にゲーセンだの服だの靴だのの店を連れ回され、ようやく帰ってきたのがこの時間。流石の一条も、疲れしているだろう。

そう思ったのだが、俺の前に立っている一条の後ろ姿は、どこか悲しく見えた。

「うん、そうね……。そうするわ」

俺の言葉に、どこか寂しそうな声で一条は返す。

「それに、あんたの家の場所も分かったし、やることもないしね」

付け加えて一条は言う。その声にも、どこか寂しさのようなものが見え隠れしていた。

——俺は、守れなかった。

ビビッと、ノイズのような耳障りな音と共に、昔の俺の姿が一条の後ろ姿とダブった。

俺は、この寂しさを知っている……。

「一条……もしかして——」

一条は俺に振り向く。そして俺は、一条の目を見る。やっぱり、この孤独を思わせる瞳は、昔の——、

「もしかして、一条。お前……独りなのか？」

俺は、そっと聞いた。

一条は、視線を俺から逸らして、そして空を見た。俺も空を見る。……綺麗な、夕焼け空だった。

「うん……私、家から勘当されたから」

一条は夕焼けから暗い地面へと目線を落として答える。

俺には、彼女にかける言葉が出なかった。俺はただ、孤独に佇む一条優花という少女を見ることしかできなかった。

一条は、顔を上げる。そして、寂しさの漂う表情のまま笑顔を作る。

「……ありがと、今日は楽しかった。じゃあね。探偵事務所頑張っ
て作りましょ！」

腕を上げ、彼女は笑って言った。まるで、痛ましい夢の中のような表情で作る笑顔は、今にも割れてしまいそうな薄氷の上を連想させる。

じゃあ。と言って、一条は家から離れて、沈む夕日の方向に向かって歩き出す。

今日の不幸の根源が、俺から速やかに離れていく。

「ま、待てよ！ 一条」

なのに俺は、何故一条を呼び止めてしまったのだろう。

「ん、なに？ 龍弥」

一条は少し寂しそうな笑顔でこちらに振り向く。

呼び止めたが、俺は一体何を言いたいんだ？ 探偵事務所を作るこ

とに關してか？ それとも何故家に来たいと言ったのかを、か？

違う。だって、俺には――その悲しそうな瞳と寂しそうな笑みが作る重みを知っている。その辛さが、どれだけ自分の心を削る行為なのか知っている。

だから、その寂しさを孕んだ一条を呼び止めてしまったのだろう。

独りぼっちの重みは、俺もよく知っているからな。

「ど、どうせ家に戻っても一人だろ？ 俺、今から飯にしようと思
ってたんだよ。よ、よかったら、入れよ」

我ながら、不器用な言い方だ。

「えっ……でも、えっと……」

一条は、予想外の展開でおろおろとしている。

「ほら、早く入れよ一条。せっかく来たんだ。何か振る舞わないと俺の気が済まない」

少しキザだったが、笑みを浮かべて俺はそう言った。すると、その笑顔に一条は少し照れたようで、顔を少し赤らめながら頷いく。「全く、今日出会ったばかりなのに、夕食をご馳走するとはな」俺は照れ隠すように独り言を言う。こうやって女の子誘うのは恥ずかしいな、やっぱ。

「——でいい」

ん？ 一条が何か言った。だけど、声が小さくて聞こえない。少し屈んで、耳を傾ける。

「何か言ったか？ 一条」

「だから！ 一条じゃなくて優花でいいって言っているでしょ！ バカ龍弥！」

いきなり大声で怒鳴った。何で怒鳴るんだよ、しかもバカって！でも、その顔は怒っているようだが、何故か俺はその顔に安心した。今の一条の表情は、俺が今日一日で散々見た我儘顔だった。

「んじゃ、さっさと家に入れ。ゆ、優花」

やはり、女子を下の名前で呼ぶのは、抵抗があるな……。

あ、ちなみに恵里香は幼なじみなんで除外。

「ん、分かった。バカ龍弥」

そう言った優花の顔の顔は、とても小さな幸せが見え隠れしていたのだった。

第五話 俺と優花とお婆さんと(前書き)

（・・ω・・）↑こいつが出現すると、シーンが変わります

第五話 俺と優花とお婆さんと

まあ、その後夕飯をご馳走することになったのだが、家には食材がほとんど無かった。

それもそのはず。さっきは思わず啖呵を切ったが、本当は今日の学校帰りに夕飯の材料を買うつもりだったのだ。しかし、優花に街中を連れ回されたせいで、すっかり失念してしまっていた。

「んゝ、どうしようか」

俺はほぼガラガラの冷蔵庫を見て唸る。

「ねえ、夕飯まだゝ？」

リビングでは優花がうなり声を上げている。

「ああ、ちょっと待ってろ。今から買い出しに行ってくる」

俺は買い出しの準備をする。すると、またもやリビングから声。

「ねえ、ご馳走するって言って、なんで今から買い出しなの？」

「仕方ないだろ。本来なら帰りしに買い出しに行くつもりだったんだから」

リビングのソファーに寝転がっている優花に言う。っていうか少しは遠慮しろよ、なんでもうくつろいでんだよ。

「お前、少しは遠慮しろよ」

優花は腕を置く場所に足を置いて寝転がっている。休日のサラリーマンか、お前は。

「いいじゃん、別に」

おそらく、こいつは何度言ってもおそらく聞かんだろう。

「分かった、それじゃすぐに戻ってくるから散らかすなよ」

そう言うと、俺は玄関に向かう。その時、優花が俺のことを呼んだ。

「ねえ龍弥、少しいい？」

「なんだ、一じょ——、じゃなかった、優花」

やっぱり、まだ名前で呼ぶのはやっぱり抵抗がある。

優花は俺とは目を合わせずそつと言った。

「あんたも、独りなの？」

その言葉は、俺の家の状況を見て言っているのだろう。両親も兄弟もいない。自分という中身だけを守ろうとしている、この貝殻のような家を。

「……どうだろうな、確かに両親は海外に出張中だし、妹弟は全員死んじまったけど、一人じゃないと思うぞ」

「——どうして？」

「どうしてって、そりゃいろんな人が俺の周りにいるからな。恵里香に燕、工藤、それに今日から……ゆ、優花もな！」

そういうと、何故か優花は顔を赤くして、でも少し安心したように

小さく、そう、とだけ言った。

「それじゃ、行ってくるから留守番頼むぞ」

俺は買い物袋を持って玄関へと向かう。

「い、いってらっしゃい」

随分ぎこちない、その「いってらっしゃい」に俺は、ああ。とだけ返した。

————ピンポン————

なんだ、この空気をぶち壊しかねん、というかもうすでにぶち壊したインターホンを押した馬鹿野郎は……。

急いで玄関に向い扉を開ける。そこにいる奴は、俺が想像した顔だった。

「よう。いい展開になっていると思ってムードぶち壊しに来たよ」

そこにいたのは、黒のパーカーを着た恵里香だった。相変わらず、黒の服と亜麻色の髪がよくマッチしている。

「何しに来た。てか、どうして優花がいる事を知っている？」

「いあん。優花だって。たった一日で、どうやら二人は恋仲へと落ちたようだな」

しまった。本人の前ではまだうまく言えないのに、他人の前で何の臆面もなく言っちゃうなんて！

「ち、違うんだ！　こ、これは優——じゃなくて、一条がそう呼べて」

「分かってるよ。第一、リュウにそんな度胸がないのは知ってる」

チキンで悪かったな。それに、俺は優花みたいなちびっ子に興味はねーよ。

もっと、こう——グラマスでスラッとした大人のお姉さんが——

「で、どうしてお前は俺の家に一条がいるのを知っている？」

くだらない妄想を、脳内で斬鉄剣を使って真っ二つにしながら、俺は恵里香に聞いた。

「だって、二人が玄関でいちやついてたのを窓から見てたからな」

「な、なんだってー！」

「それで、家に入った後も見てたけど——買い出しにも行っていないんだろ？　だと思って、一応カレーの食材を持ってきた。感謝しろよ」

恵里香がヒラヒラと手を振って、カレーの食材が入っているであろう袋を渡してきた。

「んじゃ、頑張って一条さんの面倒見るんだぞ」

そう言って、恵里香は自分の家へと戻っていった。なんたって家が隣だからな。

「まったく、せわしい奴だ」

そして、いい奴でもあるけどな。

俺は、恵里香から受け取った買い物袋を見た。ルーや人参。ジャガイモに玉ねぎ。たしかにカレーの食材一式が入っていた。

「ねー、龍弥、誰だったの？」

リビングから優花の声が聞こえる。どうやら訪問者が誰かは聞こえてなかったらしい。まあ、そのほうがありがたい。説明するのも面倒だし。

「ああ、隣のおばさんからカレー材料一式貰ったから、今夜はカレーだぞ」

俺はそう言いながら玄関のドアを閉めて、キッチンへと向かった。

「誰がおばさんだ、コラア！」

隣の家から何か聞こえてきたが、優花の耳には届いていなかったみたいだ。

(・ ω ・)

「ん！　おいしい！」

優花がカレーをスプーンですくいながら言った。なんたって料理には少しばかり自信がある。伊達に一人暮らしはしていない。

「あんたはいいわよねー。こんな料理を作れるんだから」

優花は、半分ほど食べたカレーを一旦置いて言う。

「おいおい、お前も一人暮らしだろ？ 料理ぐらい出来るだろ？」
「よ、世の中には料理の不得意な女性だっているの！」

優花は顔を赤くして言った。あ、そうか、お前料理が、

「できないのか」

「うるさあああああいいい！！」

悲鳴と同時に発生するパンチの当たり判定に俺は巻き込まれる。
ふん、と優花は鼻を鳴らす。今朝も思ったことだが、コイツの攻撃力は高校二年の女子生徒のそれを軽く凌駕している。空手でもしてんのか？

殴られた頬をさすりながら、俺は優花に聞く。

「でもさ、それならお前は今までどうやって飯食ってたんだ？」

「よ、世の中にはコンビニという天竺があるの！」

お前の言う天竺は、百円でおにぎりが買える店のことだったのか。
そりゃ三蔵法師も楽しんだな。

「でも、そんなんだったら栄養偏るだろ？」

「いいもん、別に気にしてないから」

カレーの残り半分を平らげ、スプーンを皿の上に置いて優花はぶっきらぼうに答える。

いいや、毎日飯作っている俺からすれば、それは健康を損ないかねないことだ。ここはちゃんと注意するべきだろう。

「いいや、俺が気になる。第一、そんなもん食っているから身長と

か胸とか――」

「うるさああああい！ 死ねええええ！」

コンボアップを2つ装備した優花の三連撃に俺はなすすべなく倒れる。ちなみに攻撃は、パンチ、パンチ、キックの某スニーキングミッションの達人の蛇が最も得意とするコンボだった。

俺を倒した優花は、キッチンへと食器を運ぶと、そそくさと玄関へと向かっていった。

もう帰るのか、と思いつつ、俺も起き上がって見送りに出る。

「今日はありがとう」

優花は、靴を履き終わると立ち上がって言った。まだこいつに殴られた頬が痛む。俺は、自分の頬をさすりながら優花を見る。

「ああ、お互い似たような境遇だし、困ったらいつでも来い。いつでも助けてやるぜ？」

努めて明るく言った。俺は、もう誰にもあんな顔をしてほしくはない。それが、たとえこの自分勝手に唯我独尊の一条優花でも、だ。

「うん、ありがとう」

いい笑顔だった。そこには、あの時の寂しい瞳はなかった。

「本当に送って行かなくていいのか？ 最近ここらで通り魔殺人つてのがいるらしいし」

「うん、思ったより家が近いから大丈夫よ」

そうか、とだけ言って俺は玄関を開ける。

「思ったより優しいのね」

「まあ、人並みにな」

その玄関を優花は通る。門扉を通って、彼女は家の外へと出た。俺は優花に別れの挨拶をする。

「それじゃ、また明日な」

「うん、また明日」

そう言って、優花は帰った。

今日は、なんだか濃い一日だった。探偵事務所を作るとか言う変な奴に絡まれ、そのうえ飯まで作って一緒に食べた。

今思えば、家で誰かと一緒に飯を食べたのは久々だったような気がする。どうして気が付かなかったのだろうか。なんだか、まるで優花と飯を食うのが当たり前のような気さえしていた。

「でも、まあいっか。友達が一人増えたようなモンだし」

向かいの道を渡って、優花はゆっくりと歩き始める。

俺はその姿が見えなくなるまで見送った。

第六話 長い一日 前編（前書き）

中途半端なところで終わっていますが、どうぞご了承ください。

第六話 長い一日 前編

ふと、目が覚めた。予想以上の快眠に、俺自身が驚きながらも、天井を見る。

あの目覚ましが鳴っていないということは、まだ起床時間ではないということだ。俺は、タオルケットを再び被って意識を飛ばそうとする。

だが、ここで俺の携帯が、目覚ましの代わりに快音を鳴らし始めた。一体誰だ？ こんな朝早くに――

「燕か、それとも恵里香か？」

俺は携帯を取り、着信の相手を見る。しかし、その電話番号は俺の見覚えのないものだった。俺は訝しみながらも一応電話に出る。

「はーい、もしも――」

「遅い！ 一体どれだけ待たせるのよ！」

携帯の出せる最大音量で女の子が怒鳴り込む。俺は反射的に耳から携帯を遠ざける。あまりの大音量に、一瞬鼓膜が破れるかと思った。でも、この声……どこかで聞いたことあるぞ？

そう思っただけで、昨日俺の家で夕飯と一緒に食べた少女の顔が思い浮かんだ。

「その声……まさか、優花！？」

「そうよ。なんか文句ある？」

「まてまて、なんだ？ いきなり。っていうか、いつ携帯番号をお前に教えた！」

「うっさい！ とにかく、今すぐ学校に来なさい！」

そう言って優花はブツッ！　っと携帯を切った。
切れた電話の「ツー、ツー、」という音を聞きながら、俺は大きなため息をつく。

従わなければ、何をされるか分からん。それから、わが身大事と悟った俺の行動力は迅速なもので、十分で支度をして、全力疾走で学校に向かった。だけど、着いた頃には七時を回っていた。

校門前に着くと、遠目からでも怒りを抑えているのが分かる優花が、門の横にある学校の表札の前に立っていた。

「お・そ・い！」

「そんなにはっきり言わんでも分ってる。だから全速力で走ってきただろ。それに何時だよ、俺の携帯の番号知ったの」

「昨日強制拝借させてもらったのよ」

俺に人権はないのか。

「んで、こんな朝早くに呼び出して一体何の用だ？」

「それは、今から教えてあげるわ」

と言って、優花は校庭の方へ歩き出した。一体この先に何があるんだろうか？

運動部の朝練は七時半以降の決まりだったはずなので、校庭に人の姿は見あたらない。

無人の校庭を俺達は横切って、何故か体育館裏に来た。

「お前、俺をここで消すつもりか？」

俺の率直な感想を優花に言う。

「違うわよ。アレよ、アレ」

優花は、そう言ってここから部活館を指さした。

部活館というのは、吹奏楽部や手芸部などの屋内で活動する部活が使用する部室だけで構成されている三階建ての建物で、体育館の裏側にある。俺は帰宅部だから、一年の学校の校舎位置を確かめるときに一度入ったきり以来だ。

「んで、部活館に一体何の用なんだ？」

「まあ、見てからのお楽しみよ」

すがすがしい笑顔で優花は言った。

そして部活館の三階。漫画同好会の部室の隣の部屋の前に、俺は向かわされた。

まあ、ここまで来るとさすがに何がどうなってここに立っているのか、ぼんやりと分かってくる。

「まさか……優花」

俺は頭一つ小さい優花の顔を見た。すると、優花も俺の顔を見て、フフッと笑う。

「そう、ここが！ 私の探偵事務所！『一条探偵事務所』の事務所になるの！」

な、なんだってー！

「そ、そんなことあるか！ だって立ち上げを決めたのは昨日だぞ！？」

俺は取りあえず、この現状を否定したくて言ったが、優花はそんな幻想すら一言でぶち壊してくれた。

「うん、だからあんたが昇降口に来るまでの間に、登録と部屋の準備はさせといたのよ」

なんとなく速さだ。俺は優花に屋上へ呼び出されてから二分で教室へ戻り、すぐ帰る支度をして一階に行ったのに。

「でも、他の部員はどうするんだ？ 第一、部員が五人以上いないと部は作れないぞ」

そうだ、この高校では部、もしくは同好会を作るには、最低でも五人以上の部員がいないと登録できないのだ。なのに優花はどうやって登録したんだ？ 現在の探偵事務所の所員は、俺と優花の二人だけだというのに。

「そうよ、だから部員は明日連れてくるって言ったの」

優花が当然のように言った。おい、後の三人はどこから沸いてくるんだよ。

「どうするんだよ、そんな守れない約束して」

「無理じゃないわよ。何でもやる前から無理なんて言わないの」

そのセリフは使い時を完璧に間違えている気がする。

「じゃあどうすんだよ」

俺は優花に問いかける。

「あんたの仲間から引っ張ってくればいいじゃない」

なんだ、その強引な解決策は。

俺はため息をつき、そして優花に面と向かって言った。

「俺だって、友達が多い方じゃないんだ。それに、探偵事務所なんて、あいつらが食いつくはずがない」

「そう。でも、あんたのお仲間なら、頭がいいから勘繰ってくるわ」

なんだか嫌な予感がする。

第七話 長い一日 中編（前書き）

今回は、推敲せずに、応募した時のままの投稿となります。ご容赦ください。（・ω・）↑シーンが変わる時に出現します。

第七話 長い一日 中編

あれから少し経って、俺達は自分のクラスに戻った。その頃からクラスメイトがちらほらと現れ始めた。

俺は優花と別れてから、図書室で好きな本を読みながら考える。

やはりこんな話をあいつらにするのは止しておこう。それに、集まらなきゃ探偵事務所は空中分解するわけで、俺も晴れて自由の身になれるのだ。

そう結論付けた俺は図書室を出て教室へと向かう。その途中で、今登校してきた燕と恵里香と会った。二人とも俺を見つけるやいなや少し怒った顔で俺の方へと近づいてきた。

「まったく、何で先に行ってたんだよ。携帯にメールしても出ないし！」

恵里香が腰に手を当てて言った。そう言えば連絡してなかったな。

「わ、悪い。連絡するの忘れてたんだ」

「ホントだぞ、龍弥。まったく、一人で行ったのか？」

三人で教室へと入って、燕の気だるそうな台詞に答える。

「いや、優花に呼ばれてな」

「な、なんだとー！ お前は、俺たちより一条を優先するのかー！」
「しょうがないだろ、朝六時半に叩き起こされたんだからさ」

俺は一番奥の席で窓の外を眺めている優花を見ながら言う。俺と優花の目が合った。ヤバイ、なんかすっげー睨んでる。まさに今、探偵事務所のことを言い出せ、と言わんばかりにこちらを睨んでいら

っしやる。

「ン？ どうしたんだ、リュウ」

俺はそんな恵里香の言葉で我に返る。しかし、勧誘をしなければならぬ事態は変わっていないのが現実だ。

「しょうがないな……」

俺は諦める。仕方ないので、俺は恵里香と燕に探偵事務所の設立に携わらせられたこと。そんなこんなで部員が足りないので集めろ、と優花に強制させられたこと。それで二人に部員になってくれと頼んでいることを説明した。

説明し終わると、二人は話を吟味し始める。

「フーン、大体話は分かったぞ。んで、ワタシ達にその事務所に入
って欲しいと……」

「そ、そうなんだ。別に無理にとは言わないから」

「そうか。分かった」

燕と恵里香は話を理解して頷く。

「で、どうだ？」

俺は二人に聞く。まあ、正直聞くまでもない気もする。だって、探偵事務所だぜ？ 別に名探偵の金〇一がいるわけでも、バーローが口癖の小学生もいるわけでもない、ただ自らのワケのワカン目的のためだけに立ち上げようとしている探偵事務所だぞ？ そんなの誰が進んで入るなんておもて、

「イイゾ」

「いいぜ」

——うん、気のせいだろう。なんか二人から予想外な回答を聞いた気が……。

「だからイイって言っただろ？ 話聞いてないのか？」

恵里香が不格好な蛙でも見るかのような目で言った。

「な、なんでだよ！ 俺はお前達に関わって欲しくないんだよ！」
「そりゃワタシだって、関わりたくないさ。でも、我が身大事というか——」

「けど、一条なら俺達がNOって言うことくらい分かってるはず。それでも龍弥に勧誘させたってことは、断ったらそれ相応の『何か』を、俺と恵里香にしでかすつもりだってことだろう？ そんなの、俺も恵里香もごめんだ」

燕がこちらを見ている優花を見ながら言う。そして優花もばつの悪そうな顔をする。

「——にやり」

表情を言葉で言わんでも、お前の考えていた事は分かった、優花。つまり、優花は自分の校内での評判を逆手に取ったってことだ。何をしているのか分からない。何をしでかすか分からない奴の話を断るのだ。その後どんな仕打ちが待っているか分かったもんじやない。燕は要領がいいから、勘繰り過ぎたんだ。

何も無いのに、何かされると燕は思ったんだろう。

「結構頭いいのな。優花は」

そんな事を考えていると、担任の岡山が入ってきた。

「おい、HRを始めるぞ。席に着け」

その声が聞こえると、立ち歩いていた生徒や話していた生徒が席に着く。俺達も急いで席に着いた。

「あれ、俺の隣に席がある……」

どういうことだろうか。俺の左側の席。つまり学校を支える柱の影にある机は、その柱と黒板の位置の関係で、黒板が少し見づらいのだ。だから、ここには席は存在しないはずなんだけど。

そんな俺の疑問をよそに、先生は教壇に立って全員を見渡す。すると、急に頬を緩ませて皆に告げた。

「今日は、みなさんに転校生を紹介します」

周囲が一気にざわめく。

ん？ そんな話は聞いてないが。第一、転校生が来る場合は始業式の日に来るのが当たり前のような気がする。

「先生、なんで昨日じゃなくて今日なんですか？」

俺と同じ事を考えていたのか、燕は手を挙げて先生に聞く。

「ん？ ああ、本当は春休みの初め頃から引っ越しては来ていたんだが、転校生の子は体が弱くてな。体調の関係で昨日は学校に顔を出せなかったんだよ。さ、入ってきなさい」

みんなは開きっぱなしになった教室のドアに視線を送る。一体どんな転校生が来るのか。男なのか、それとも女なのか、美人なのか不細工なのか。

俺も当然そちらの方へ意識を向ける。

「し、失礼します」

外から控えめな言葉と共に入ってきたのは女の子だった。しかも……

「め、めちゃくちゃ美人……」

男子全員が同時に漏らした。もちろん俺も。

入って来た女の子は、優花に負けず劣らずの美少女だった。優花ほどの長さの黒髪を後ろで二つに分けている。ツインテールではなく、降ろした髪を白い紐で括っついて、昔の日本のお姫様を連想させる髪型だ。そしてモデルのような細いスレンダーな体つき、身長は平均的な高さで、なにより守ってあげたくなるような儚さが伝わってくる。

「それじゃ、自己紹介を……」

先生にうながされて小さく、ハイ、と返事をして彼女は黒板の真ん中に立った。

「えっと、か、加納綾です。宜しくお願いします」

どきまぎとした自己紹介にもみんなは拍手をする。

「席はその高野って子の隣だからな」

と言って、先生は俺の隣の席を指さす。そうか、この席は加納さんの席だったのか。

加納さんは、申し訳なさそうに席に着く。その時、俺と一瞬目が合う。

「よ、よろしくな、加納さん」

「えっと……。よ、よろしくお願いします。高野君」

やべえ、近くで見ても綺麗だ。

それから先生の連絡が始まる。内容はどれも、最近現れた連続殺人についてだった。まあ、五人も殺されれば学校側も警告やら何やらしないといけないもんな。

「これで、H Rを終わるぞ。委員長！」

先生の一言で、つかの間の休み時間になると、転校生の最初のイベントである質問攻めタイムの始まりだ。クラスの明るい女子が一気に加納さんの席を取り囲む。

「ねえねえ、どっから来たの？」

「ねえねえ、家族構成は？」

「アドレス交換しようよ」

この手の攻撃は誰でもたじたじになる。案の定、加納さんもたじたじになっている。

まあ、これも転校生としては仕方ないことだ。

「いやー、最初はビックリしたぜ。なんせ転校生だからな」

燕が後ろを向いて話しかけてくる。

「まあ、今は気にしても仕方ないだろう？　それに。なあ龍弥、いいこと考えたんだが」

いかにも悪巧みをしていると言わんばかりの悪人ズラで燕は顔を近づける。

「なんだ、一体……それに顔が近い、離れろ」

燕はフフン、と鼻を鳴らして腕を組み、待っていましたと言わんばかりに見栄を張る。

「あの加納綾を探偵事務所に入れてみないか？」

まさか、いい案というのはこの事だろうか。

「断る」

「いや、何故断る」

何故今日転校してきた子を変な探偵事務所に監獄しなければいけないんだ。もし、勧誘して入部してしまえば、彼女の高校生活は早くも玉碎してしまうだろう。

「じゃあ、何で加納さんを入れなきゃならないんだよ」

俺は、一時間目の用意をしながら言った。その横ではまだ加納さんに群がる女子生徒達が黄色い声ではしゃぎ回っている。

「だって、考えてみろよ。まず、女子部員のメンツは？」
「メンツって、まず優花だろ、それに恵里香だろ？　それがどうした」

っていうか二人しかないけど。

「そこに加納が加わると、一体どうなる？」

「何にも起こらねーよ。何かモンスターでも召還されるのか？」

「なんと！　美少女トライアングルが完成するのだ！」

「な、なんだってー（棒読み）」

「美少女、そしてトライアングル……。なんて甘美な響きだ。甘すぎて糖尿病になっちまいそうだ！」

「糖尿病でも心臓病でも勝手になつてろよ」

「そして、そのトライアングルの中に足を踏み入れる。すると――」

「おい、燕。そろそろ現実に戻ってこー」

「そうすると俺たちは、もとい！　俺はモテモテになるのだ！　ウヒョー！　やべえ、興奮してきたぞ。テンション上がってきたー！」

ダメだ。俺の声は聞こえない。なんだかわけの分からない言葉を繋げている。奇妙なうえに、こいつが探偵事務所に入った理由が何となく分かった気がする。

しかたない。今の燕を止めるにはこの言葉しかないのか。

「――分かった、その代わり条件がある」

「よし、それで？」

いきなり真面目な顔で椅子に座ってこちらを見る。今の通り燕は、イケメンの変態である。読者のみなさん。よく覚えておいて下さい。

「お前が誘っても優花が認めなかったら意味がないだろ？　だから

優花に勧誘させるんだ」

「いいだろう。その条件飲んだ。それじゃあ、もし一条が勧誘をミ
スった場合は俺が探偵事務所から出て行行ってやる」

いまいち燕のペナルティがよく分からなかったが、計画通りだ。

俺があいつと少しの間いて分かったこと、それはあいつが初対面
の人とは喋られないということだ。

俺のように、怒鳴り、蹴飛ばし、罵声を浴びせたことのある相手な
らOKなのだろうが、喫茶店であいつは致命的な弱点を俺に見せて
しまったのだ。

これなら、いくら部員が欲しくても言い出せずに終わり、他に宛も
なく探偵事務所は空中分解するだろう。これで今まで通りの生活が
戻ってくる。まさに策士な計画。

一時間目が始まり、先生が入ってきたので、この続きは放課後：
…つまり、締め切りギリギリにした。これで、この馬鹿げた物語と
もオサラバできる。

そんなこんなで一時間目の休み時間、俺は優花に例の話をした。

「な、なんでそんなことしたのよー！」

案の定のリアクションだ。俺は構わず続ける。

「なんでだ？ 勧誘するんだぞ？ いい事したと思ったんだけどな」

俺はわざと悪人ズラで答える。

「あんた……私が人見知りするの知って約束したでしょ！」

ああ、知ってないとこんな事を約束したりはしねーよ。

「けど、この学校にはもう勧誘しても掛かる奴がいらないだろう？　なら、どのみち声を掛けるしかないんじゃないか？」

「くっ……。わ、分かったわ。絶対勧誘してやるんだから！」

ずっと下だと思っていた俺からの反逆にわなわなと震えながらも、優花は俺の提案に頷いた。

すまないな。俺はお前と友達でいたいんだ。その意味不明な部活仲間としてじゃなくな。

(・ω・)

そして、退屈な授業は終わり、遂にHRまでもが終了し、放課後がやって来た。

俺は加納さんが帰る前に声を掛ける。ここまで優花にやらせるんだ。俺が舞台ぐらい作ってやらないと。

「なあ、加納さん。ちょっといいか？」

加納さんは帰ろうと鞆に荷物をまとめているところだった。彼女は顔を上げてこちらを向く。

「な、何ですか？　高野君」

「ああ、ちょっと言いたいことがある奴がいてさ。ちょっと屋上まで来てくれないか？」

普通にそう言ったのだが、加納さんは少し脅えた表情になった。何かしたっけ？　俺……。

「あ……わたし、何か悪いことでもしましたか？」

か、勘違いされてる！

「ち、違う！ 加納さんに話を聞いて欲しい女の子がいて、そいつに頼まれて聞いているんだ！」

「そ、そうですか、安心しました」

勘違いに気付いたのか加納さんは胸をなで下ろす。

「それじゃ、来てくれるか？」

加納さんは返事をして、俺は屋上へ案内した。
よし、あと一步。あと一步で終わる！

第八話 長い一日 後編（前書き）

長いです。でも、頑張って読んでください！

第八話 長い一日 後編

重い鉄の扉を開けると同時に、穏やかな春風が薄桃色の花びらを運んできた。俺は、その穏やかな風と夕日に眩い思いをしながらも、彼女を扉の先へと通した。

ここは北館の屋上。昨日俺が優花に連れてかれた屋上だ。

加納さんの艶のある黒髪がゆるりと靡く。俺は、そんな彼女の目線の先を見る。

傾く夕陽を眺める影が一つ。桜の花弁と共に靡く髪は、長く美しい。夕日に反射する銀の手摺に手を置き、優花はただ一人その時を待つ。

「約束通り連れて来たぞ。後は、お前次第だ」

俺は優花にそう言うと、扉の横の壁に背を預ける。

加納さんは少し前へ進み、優花に聞いた。

「一条さん……ですよ？ お話って一体なんですか？」

そう問いかけられて、優花はようやく振り返る。けれど、視線は加納さんを見ていない。というより、恥ずかしさのあまり見れていない。

「えっと、その……」

「……………」

加納さんも黙って優花の言葉を待っている。お互いの長い黒髪が靡く様だけが、時間の経過を物語っている。

「あの……お、お願いがあるんだけど」

ようやく優花が口を開く。そう言う声は、少し裏返っている。おいしい、聞いているこっちまで緊張してくるじゃねーか。

「は、はい……。なんですか？」

「わ、私ね、探偵事務所を作ろうとしてるんだけど。よ、よかったら入ってみない？」

直球。ストレートに、優花は加納さんに内容を伝える。でも、加納さんの返事は即答ではなかった。気まずい沈黙が数十秒続いてから、小さい返答が耳に入った。

「……ごめんなさい。わたしは、人助けなんてできる人間じゃない、です」

やっぱり。常人ならそういう判断をする。残念だったな、優花。優花が煮え切らないといった表情で地面を見る。加納さんは、それで呼び出しは終了だと思ったのか、別れの言葉を優花に告げた。

「それだけなら、いいですか？」

「……ッ……待って！」

踵を返して扉へと向かおうとする加納さんを、優花が止めた。優花の表情は必死で、どこか悲痛の色を滲ませている。

加納さんは少し鬱陶しげに眉を顰めると、振り返って優花を見た。

「まだ、何か用ですか？」

「どうして、あなたもその目ができるの？」

ん？ 目？ 一体何のことだ？

「あなたの目、私や龍弥と同じ——寂しさを知った目……」

俺や優花と……同じ？

「な、なんのことですか？ からかわないで下さい」

加納さんも意外なことを指摘されたのか、声に焦りがあった。

優花は、それを無視して続ける。

「私にも。いいや、そこにいる龍弥にだって分かる。その寂しい目が、どれだけ辛いことを経験しなきゃできないのか、私は知ってる！」

優花は半ば叫びながら言う。その声音が。想いが。昨日の玄関前で優花を想起させる。

だが、加納さんにはそれが不愉快だったようだ。

「あなたに何があったのなんて知りません。そ、それに、わたしはそんな経験したこともありません！ 話が終わったなら帰ります！」

今までになくきつく加納さんは言う。俺の横を通り過ぎ、ドアに手を伸ばす。

「——私は中学三年の時、親に勘当されたの」

辛い記憶を語る優花の顔が、苦みを訴える。一瞬だけ風が止み、同時にドアノブへと伸びていた加納さんの右手も止まった。

勘当。親と子の縁を切ること。家族としての縁を切って、他人と

して捨てられること。

俺も、それぐらいのことは知っている。

「……私の本名は藤原優花。名家藤原氏の末裔だったの」

その言葉に、俺は驚愕する。

藤原。平安時代に栄えた貴族。中臣鎌足から始まった歴史に名を残す名門中の名門。

歴史に名高い藤原家の生まれの少女。優花、お前本物のお嬢様だったのか。

「知ってる？ 一条っていうのは、藤原の分家の名。つまり、私はもう必要ないのよ。京都からこの岡崎市まで飛ばされたの。知らない土地で、知らない人達の中でいきなり一人で生活しろ。って言われたのよ」

優花の語る声は自嘲気味で、愚かな子供を嘲るような声だった。

「お金には困らなかった。けど、家族との絆も、友達も、大切な物をも全部消えた。残ったのは、抜け殻のようになった私だけ。学校でも馴染めず、二学期にはクラス内に私の居場所はなかった。だから、私は暴れた。私の悪口を言う奴は殴った。何時しか、学校中の人間が私を避けていた。家に帰っても、温かく迎える家族は居ない。騒がしかった妹達も居ない。もう、何もかもがどうでもよくなった」

聞いている内に、あの時の優花の笑顔の意味がようやく分かった気がする。ひどい孤独を抱えた者の笑顔。痛みを曝け出す自傷の表情。

優花、やっぱりお前は……

「けど、半年前に父親から電話が来たの」

どこか遠くを見ながら優花は語り続ける

。「何か、人として偉大なことを成し遂げろ、そうすれば勘当をナシにしてやる。ってね。私は約束したわ。『半年以内に、なにか偉大なことを成し遂げる』と、父親にね。それから私は考えた。一体どうやって？ 一体何をして？ 私は考えて、みんなから変人呼ばわりされても考え、行動した。そして思いついた。探偵事務所を作ろうってね」

そうか、全てはこのためになって事か。だから、あそこまで強引に……。

「もう、約束の時間まで一ヶ月を切ったの。もう、時間がない」

すると、優花は俺の方を見る。視線が合う。

「その龍弥には昨日出会ったの。こいつだけは、私を避けずに、なんだかんだ手伝ってくれた。初めての人よ」

照れくさくなって俺は下を向く。そして、同時に後ろめたくもなかった。

俺は手伝ったところか、こうやって優花を追いつめていたのだから。

「あと、一〇分で最後の部員を連れてこないと、探偵事務所は解散しちゃうの」

「……………」

「あなたに、どんな手を使っても入部して貰おうとは思ってない…

…。けど、その代わり、一つだけ私のお願いを聞いて欲しいの」
「――何、ですか？」

沈黙を貫いていた加納さんが、静かに聞き返す。すると、優花の視線は再び俯き気味になった。

「わ、私には、女友達なんて一人もないの。だ、だから、その…」

顔が真っ赤になりながら、声を振り絞って優花は頭を下げる。

「わ、私と友達になって下さい！」

思いもよらない告白。加納さんだけじゃない。俺だって、優花が唐突にお友達になりましたようなんて言い出すなど、予想だにしていなかったぞ。

優花にそう言われた加納さんは、踵を返して、無言で出て行こうとドアノブを回す。ドアを開け、ドアの向こう側へと足を伸ばす。さて、どうしたもんか。優花は自分の過去を語って、加納さんは断ってこの場を去ろうとしていて、何もしていないのは俺だけ。そりゃそうだ。俺は最初からこの二人の会話に交わる気なんて無かったんだから。

でも、このまま加納さんを帰していいのか？ 別に探偵事務所云々は断ってくれてもいい。優花は俺の事を良い風に言っていたが、俺も正直なところ面倒事は嫌だ。

でも、俺がこの場で加納さんを見過ごしたくない理由は別にある。

「なあ、加納さん」

俺の言葉に、加納さんが足を止める。

何故、二人の会話に交わる気が無いと言った俺が、加納さんを呼び止めたか。

その問いに対する答えは、すごく簡単に簡潔だ。

俺は、頭下げてまで友達になってくれと言った優花が、変なヤツだと思われてしまうのが、どうしようもなく耐えられなかった。

「俺もな、最初は……いや、さっきまでこのまま加納さんが断ってくればそれでいいと思ってた。平和な学校生活が戻ってきてそれで終わりでも良かった。けど、俺は思ったよりお人好しみたいでな。俺も結構ひどい目に遭ってきた。だから、優花をほっとけないんだよ。加納さんも、話し相手になるだけでもいい。あいつと友達になってやってくれないか？　俺からも頼む」

俺は加納さんの方を見ない。それは加納さんも一緒だろう。視線を感じない俺は、ただ沈もうとしている夕日だけを見つめる。

「龍弥――」

優花の夢いこれが、俺の鼓膜を刺激する。

風が、止んでいた風が再び吹き始めた。それは、いたって自然なことだ。普段なら、そこに感慨なんて抱かないだろう。でも、

でも俺は、全てが動き始めたのではないかと思った。

「……わたしは、昔、小学校に行っていたときに病気で入院していました。そして、同じ病室の女の子から虐められて、心が病んだ時期があるんです」

今まで夕日を背にして黙っていた加納さんが、唐突に語り出した。

「それから、退院してもしばらくは人形みたいになって、その頃に

付いたあだ名が『操り人形』だったんです。それ以来、精神も安定して昔のように元に戻った後も、その名前で虐められ続けました」

何も、誰一人として声を出さなかった。

「高校二年になって、わたしは遠い学校——つまり、この岡崎高校に来たんですけど、正直不安だったんです。小学校以来、ともに友達なんて出来たこともないわたしが、楽しい高校生活が送れるのか？ って」

ああ、そうだったのか。

優花の言った通りだ。彼女も、俺達と同じような辛い過去を経験していたんだ。

優花も俺も、加納さんの方を見る。俺たちと同じ傷を負った少女の方を……。

「だから、友達になってなんて言ってくれる人に会えて嬉しかった」

加納さんは、一呼吸置いた。それから優花のほうを見る。

「本当はさっきまで、からかわれていると思っていました。昔にも、こういう嫌がらせも受けていて、なんだか信用できなかったんです……。でも、高野君の一言で——そんな半端な気持で一条さんが言っていない、ってことが分かりました」

「それじゃあ——」

加納さんは優花の方へ振り返り、涙顔で、それでも笑顔で答えた。

「優花さん、わたしとお友だちになって下さい」

「ほ、本当？」

優花の顔に、笑みの花が咲き乱れる。嬉しさのあまり、ぴよんぴよんと飛び跳ねる優花を見て、俺も少し心が安らいだ。

加納さんは優花の前まで走ると、優花の手を握った。優花はボツと顔を赤らめると、緊張した声で言った。

「こちらこそ、おおお願いします」

なんだよ、そのお見合いみたいな返事の仕方は。俺はそう思いながら呟いた。

「まったく、いいコンビだな」

二人は、向こうではしゃぎ合っている。全く呑気だな。ん？ だけど、何か大切なことを忘れてないか？

俺は現実の切羽詰まった状況を思い出してしまった。

探偵事務所の承認。その締め切り時間に、もう余裕が無いことに。

「優花、約束の時間まであと少ししかないけど、行かなくていいのか？」

優花はそれで我に返った。でも、優花は俺に向かって首を縦に振る。

「もう、探偵事務所は諦めるわ。どうせ人数が足りないんだもん。またなにか違うことを考えましょ」

「けど――」

俺がそう言いかけたとき、優花は口元に人差し指を立てる。

「いいの」

どうやら、優花は吹っ切れたらしい。すがすがしい諦め方だった。それに、本人が言うなら仕方ないだろう。俺は、もう口出ししない。

「分かった、それじゃあ、一応部活館の人にそう言ってくる」

そう言って、俺は屋上から走りだそうとした。そんな時だった。

「その、部員が一人足りないんですね？」

優花の両腕を握ったままの加納さんが、俺に言った。俺は振り返って、加納さんを見る。

加納さんの黒い瞳には、決意の表れがあった。

「友達の願いが消えようとしているのに、放っておくわけにもいかないです」

今まで聞いたことのないような加納さんの凜とした声。その声は儂い印象を醸し出す加納さんには似合わず、燦然と輝く意思が垣間見えた。

「加納さん……」

優花は小さい声で言う。すると、加納さんは優花に笑いかけながら囁いた。

「友達なんだから、ちゃんと下の名前で呼んでよ。優花」

そして、彼女は俺にこう告げた。

「加納綾。一条探偵事務所に入部します」

この日、一条探偵事務所は正式に動き始めた。

番外 殺人鬼の夜 (前書き)

これは、深夜の岡崎市のどこかで起こった事件。優花と綾が友達となった、その日の深夜に起こった出来事です。

番外 殺人鬼の夜

涼しい春の夜風を受けながら、私は気まぐれに獲物を探す。この街の夜は、ひどく静かだ。閑静、なんてものじゃない。全ての家が、灯りすらも外部に漏らさないように息を顰めている。

まあ、そんなことはどうでもいい。私は、ただ黙々と獲物を探だけだ。

今日の風は一味違った。いや、風を味と表現するのはおかしいと思うが、そう表現してしまうのは、ただ単に私の語彙が足りないだけだからかもしれない。

ただ、風がいつもより気持ちいいのだ。風が靡く音も、吹かれて舞う自分の髪も、鬱陶しいだけのものだったのに。

どうやら何かいい事でもあったのかな？ 『わたし』は。

「あっははははは！ 何それ、まじウケるわぁ！」

酷い雑音が、私の鼓膜を刺激する。ふと振り向くと、川の向こう岸。今から私が渡ろうとしていた人気のない橋に、一台の自転車が侵入してくるところだった。

自転車を運転しているのは、茶髪的女子高生。

「ウソお？ 幸助のやつ小豆に告ったの？ マジでえ〜？」

汚い声に、汚い顔。汚物のような肌をした女が、携帯電話を片手に夜道を走る。

それは、なんて無防備な姿だろう。

彼女は、きつと今から自信を待ちうける悲劇なんて、微塵も信じていないだろう。今の彼女に、もし「あなたは今から死にます」と宣告しても、まったく相手にされない。それは、言うまでもない結

論だ。

だから、

だから、私は彼女を殺す。

目的もなければ、理由もない。

そもそも殺人鬼にとって、人殺しに対する理由の追及は必要だろうか？ そんな瑣末事は、考えるまでもない。

ヒトを殺すのが、殺人鬼の存在理由だ。それ以上の意味は無い。

私は、足取りを変えずに橋へと進入する。橋の幅は軽自動車がなんとか渡れるほどの狭さだ。周囲に灯りはなく、灯りの消えきったよく分からない施設だけが、自転車女の背後に建っていた。

目測では、自転車女と私が交差するまで数秒程。それだけあれば、充分に『殺し』は可能だ。

殺しの基本は無音。

音を出さなければ気付かれない。

私は、音もなくエモノを抜き放つ。鍛え抜かれた刃は、痩せた狼の眼光のように鈍い銀色を放つ。

「そりゃ、アイツはキモいし小豆には釣り合わない――」

殺しの基本は手際。

早く始末すれば気付かれない。

静かに振った銀の剣閃は、女子高生の首を的確に撥ねる。切断の音は無く、ごつん。と、重たいボーリング玉のようなものが、コンクリートを打ち付ける音だけが周囲に響いた。

殺しの基本は即撤退。

逃げるに越したことは無い。

その場で殺しの感傷に浸っている場合ではない。すぐさま刀身に付着した血を紙で拭き取り、未練なくその場を後にする。

これが、私の『殺しの三カ条』だ。これを厳守している限り、私が犯人だということは絶対にバレることはな

————ガシャン！　カラララララ————

「あ」

首の無くなった体が操縦する自転車が、橋の向こう側。つまり、私が歩いてきた道の真ん中で盛大に倒れた。

殺しの基本は無音。

音を出さなければ気付かれない。

その後、私は全力でその場から走り去った。

第九話 非日常への誘い（前書き）

（・・ω・・）↑シーンが変わる時に出現します。

第九話 非日常への誘い

四月の朝は暖かい。先月まで尾を引っ張っていた冬の名残は完全に消え去り、暖かな日差しと穏やかな風が、玄関へと赴いた俺を迎える。

玄関の向こうには、お隣さんであり幼馴染の恵里香。親友の燕の二人が待っている。俺はそんな彼らと共に学校への道のりを歩む。それが、当たり前障りのない俺の日常だ。

そんな通学路の途中。俺は、昨日の出来事を二人に話した。加納さんが優花の友達になったこと。

探偵事務所が、今日から始動すること。

前者は俺にとっても望ましい出来事だったが、後者はそうでもない。今までのように、何か行動を起こしてまで設立を阻止しようとは思わないが、少なくとも俺は、優花とは同じ痛みを知る友人同士でいたかったのが本音だ。

そんなことを考えている時だった。

「ん？ あんた達じゃない。奇遇ね」

聞き覚えのある声が、俺達の後ろから聞こえた。俺は嫌そうな顔で振り返る。

俺の想像した顔が、俺の頭一つと半分程下から見えた。

「またお前か、優花」

「またって何よ、登校中に会うのは初めてでしょうが」

長い髪を不機嫌そうに揺らしながら優花は言う。探偵事務所を立ち上げたというのに、そのテンションはいつも通りだ。

「おはようございます。みなさん」

ん？ どうして加納さんまで一緒にいるんだ？ 優花の隣には、転校生兼探偵事務所所員の加納綾さんがいた。

「あれ？ どうして加納さんが一条さんと一緒に登校してるんだ？」

恵里香が俺のモノローグと同じことを言う。

「えっと、結構家が近いことが分かって、今日から一緒に登校することにしたんです」

加納さんが、とても嬉しそうに話してくれた。その眩しささえ感じる笑顔に、昨日の哀しい目を想起することはなかった。

「そうか、それはよかったな。加納さん」

俺は、加納さんの方を向いて言う。

「はい！」

ま、なんだ。すごい笑顔だな。見ているとこっちまで嬉しくなる。俺たちは、いつも以上に賑やかな通学路を、まっすぐ歩いていった。

(・・ω・・)

さて、時間は経って昼休み。俺は食べきった自作弁当を鞆に仕舞う途中、優花の席から戻って来た加納さんに呼びとめられた。

「あ、あの、高野君。ちょっと、いいですか？」
「ん？ 別にいいよ。どうしたんだ？」

別にたいした用もないのでそう言うと、加納さんはもじもじと、何か言い辛そうに視線を逸らす。

「えっと、こんなところでは言えないことなんですけど……」

「え？ ここでは、言えないの？」

「はい……。ちょっと、二人きりでお話ししませんか？」

え？ 何このシチュエーション。転校二日目の少女に、俺はいつフラグを立てたんだろうか。

「——こちら近衛。アサルト部隊の要請を求む」

なんか前の席から燕の奇妙な声が聞こえた気がした。

「えっと、別にいいけど……」

「ほ、本当ですか？ ありがとうございます」

加納さんは、俺の返事に嬉しそうに微笑む。ってか、さっきから彼女以外の視線（主に男子生徒）からの視線に並々ならぬ危険を感じるんだけど。

一方、加納さんは少し恥ずかしそうに頬を赤らめて俺を見た。

「では、人気のないところへ案内してくれませんか？」

「突撃開始い！！！！！！！！！！」

真ん前の燕が突如叫ぶ。そして、その合図を待っていたとばかり

に教室に侵入してきたのは、悪鬼羅刹の如く怒り狂った男子生徒たちだった。

「GO！ GO！ GOオオオオオオ！」

しかもめっちゃ殺気立っているんですけど！ めっちゃ俺怖いんですけど！

「な、なんなんですか！？ あの人達！」

「知らないよ！ 俺の知り合いにあんな形相のやつらはいない！」

とにかく、俺は加納さんの手を取って後ろの扉からクラスを出ようとする。その時、燕と目があった。燕は、こちらを見て「ニヤリ」

「俺が作った、美少女保護団体のアサルト部隊から逃げられるかな？」

「学校で私設部隊作り上げんなぁー！」

第十話 一人の少年の話（前書き）

元の話が応募用だった為、中途半端なところで切っちゃいました（汗）
続きは明日うpします！すみません！

第十話 一人の少年の話

はあ、はあ……。こ、ここまで来れば、大丈夫か」

額の汗を拭いながら、俺は北館の屋上の扉を閉める。本気の疾走で熱せられた背中に、ひんやりとした鉄扉が当たる。その気持ちよさに背中を預けながら、俺は大きく息を吐く。

しかし、今まで来たことのなかった北館の屋上に、まさか三日連続でやってくるとは。

「っはあ、——はあっ、あの人達、本当に学生なんでしょうか……」

完全に息の上がった加納さんが、絶え絶えに言葉を紡ぐ。

「さあ。でも、普通の学生はエアガンやら殺傷能力のないスタンガンなんて持ち歩かない」

あいつら、BB弾が入ったエアガンやらビリビリくるスタンガンで俺の事散々狙いまくってきやがった。俺も反撃したけど、あいつら本物そっくりの防弾チョッキなんか着てやがって、攻撃が全然通らなかった。流石未来の刑事を目指す近衛燕の特殊部隊だ。装備が違ふ……って、いろいろとおかしくないか？

「でも、ここなら誰も来ない。だいぶ道草食ったけど、そろそろ、何で俺を呼び出したのか教えてくれないかな？ 加納さん」

「あ、はい。その……」

そう言いかけて、加納さんの体が、ふらっと力なく揺らぐ。

「か、加納さん！」

俺は慌てて、彼女の細い撫で肩をしっかりと掴む。

走りすぎて体調が優れないのかもしれない。もともと病弱だった加納さんにとって、先ほどの逃走劇は少し酷だったのかも。

「だ、大丈夫——です。ちょっと頭痛がただけで……」

そう言って、加納さんは俺の手を握って肩から離す。けれど、顔色が悪い。彼女の台詞は、俺にはただの空気にしか聞こえなかった。

「大丈夫なわけあるか。今すぐ保健室に——」

「……高野君は、どうして優花と一緒にいるんですか？」

唐突に、そう言われた。

「どうして、って、言われてもなあ」

本当にどうしてなのか、自分でも言い切ることが出来なかった。何度か頭の中で考えてみたが、具体的な回答が見つからない。だから、俺はこの問いに対しての回答を持ち合わせなかった。

「ごめん、具体的な返事はできそうにないよ。でも、何でそんなこと聞くんだけ？」

加納さんは、視線を俺からコンクリートの地面へと向ける。

「あんなに必死でわたしを必要としてくれた人は、優花が初めてだったんです。わたしは、優花の一番の親友になってあげたい。そう

思いました。だって優花も、わたしと同じ、辛い過去を持っているのだから……」

父親に勘当され、家族も地位も何もかも失った優花。
同室していた少女に虐められ、精神崩壊を起こしてしまった加納さん。

「辛い、過去——か」

俺にも、無いわけじゃない。俺にだって、辛かった出来事はある。思い出しただけでも、自分の無力さに涙してしまう時期だってあった。

「だから、高野君が優花に何だか言って付き合っている理由は、高野君の過去にあるんだと思いました」

加納さんは、右手を額に押しつけて頭痛に耐えている。彼女の紡ぐ言葉はか細い。

「失礼を承知で聞きたいんです。高野君。あなたに、一体何があったんですか？」

先ほどの汗が、すぐに消えていく。代わりに、痛いくらいの風が俺を吹き付ける。

「——昔話も、たまにはいいかもな」

俺は深呼吸をして、空を見上げる。

「俺には二人の弟妹がいたんだ。弟は十歳、妹は十二歳で、歳の近

でいるのに、俺は何もしてやれなかった。そんな俺が、俺自身が、憎くて仕方が無かった。

「……最期に、遥は言ったんだ。『お兄ちゃんは私達の方まで生きて』ってな」

それが、俺の妹の最期の言葉だった。

「……………」

「……………」

お互いに黙ってしまう。俺が話した手前、この空気を打破するのも俺の役目、なのだろうか。

とりあえず、上演終了の言葉でも言っておくか。そう思って、俺は口を開く。

「ま、俺の昔話はこんなところ——」

そう言いかけて、俺は目の前の危機に思考が停止した。

「はあ——はあ、はっ、はあ——」

にじみ出る汗、青白い顔。力なく漏れる吐息。弱りきったその姿に、俺は先程話したばかりの妹の姿を重ねてしまう。

「加納さん！」

間違いなく異常だ。ただの頭痛でこんなに容態が悪化するわけない。とりあえず、こういう場合はどうしたらいいんだ！？ 意識の確認が先か？

俺は混乱しながらも、耳元で彼女の名前を呼んだ。

「加納さん！俺の声が聞こえるか？」

……返事は返ってこない。ただ、苦しげな吐息だけが聞こえる。しばらくして、呻くような声と共に、加納さんの目が、うつすらと開かれる。

「——たか、の……くん」

「っ！加納さん！」

「約束——してくだ、さい……」

俺の肩を、加納さんは弱々しく握る。

「ああ。分かった。何だ？」

混乱を悟らせないように、俺は努めて冷静に頷いた。加納さんは、小さく漏らすように言葉を紡いだ。

「——今からのわたしを、忘れてくれませんか？」

「……何言って——って、加納さん！」

そう言い残すなり、彼女の右手はぺたり、と力なく地面に落ちる。マズい。何が何だか分からないけど、とにかくマズいぞ。取りあえず、保健室に連れて行かないと！

そう思って、俺は彼女を抱きかかえようと手を伸ばした、その時だった。

第十一話 出会い2 (前書き)

ここから、分割分後半です！

第十一話 出会い2

そう思って、俺は彼女を抱きかかえようと手を伸ばした。その時、

――バチン！

だが、俺の手は防がれるはずのない手によって防がれた。
目を覚ました加納さんに、弾かれたのだ。

「気安く触らないで」

遠く澄んだ声が、鋭い言葉を投げる。彼女はそう言って立ち上
ると、何事も無かったかのように辺りを見回した。

俺は思わず聞いてしまう。

「大丈夫、なのか？」

なんだか、先ほどまでの彼女とは思えない。それに俺の気のせい
か、先程までの加納さんの瞳は透き通った黒だったのに、目の前の
加納さんの瞳は綺麗な金色。そう、まるで猫のような瞳だった。

加納さん？ は、俺の顔を一瞥すると、屋上から見える街並みを
見渡す。春のそよ風が、彼女の長い髪を美しく靡かせる。

「ふん。あら、涼しくて見晴らしの良い場所じゃない」

冷えた黄金の瞳が、学校一のスポットに及第点を与えた。

「おい、加納さん。体、大丈夫なのかよ」

先程の苦痛に歪む顔が、まるで嘘のような涼しげな顔に若干の疑問を覚えつつ、俺は再び彼女に聞いた。すると、ようやく彼女は俺に振り向いてくれた。

長い黒髪が、春の青空を背景に宙を舞う。

「加納——？」

加納さんは、自分の名字を復唱する。まるで、初めて聞く名前だと言いたげな声で。

でも、加納さんは加納さんだ。何やら目の前の少女は、自分の名前を不思議に呟いているが、俺の目の前にいるのは間違いなく加納さんで——って！ 何で俺がそんな意味不明な事を考えないといけないんだよ！

「あ、あのー加納さん」

「あ、加納って綾の事か！」

突如、加納さん？ が閃いた！ と言わんばかりに答えた。俺は、あまりにもいきなりの事で驚いて彼女に怒鳴ってしまった。

「な、なんだよ！ ビックリさせるな！」

しかし、俺のことには目もくれず、加納さん？ は、制服のポケットから髪留め用のゴムを取り出すと、それを口にくわえて、留めていた二つの髪留めを外し、髪をかき上げる。

そのまま、先ほど口にくわえていたゴムで一本に髪を束ねる。すると、見事なポニーテール姿に早変わりした。

加納さんらしからぬ、その凛々しさと絶妙にマッチしていて、とても似合っている。

「? 何よ」

俺の視線に気付いたのか、加納さん? は、俺に不機嫌な視線を投げかける。

見とれていた俺は、思わず視線を逸らしてしまう。

「いや、ポニーテール姿も似合うなうって、思っ

ちなみに、俺の好みの髪型がポニーテールだというのは内緒だ。

「……そう。ありがと、高野君」

でも、さほど関心も無いのか、俺からすぐに視線を空に戻す加納さん。

「なあ、加納さん——だよな?」

おそろおそろ聞いてみる。いきなり体調が戻ったと思ったら、いきなり態度がぐると変わって。これじゃあ、まるで二重人格者みたいだ。

彼女は、鬱陶しげな視線を俺に向けると、ツンとそっぽを向く。

「私が誰であろうと、あなたには関係ないでしょ?」

彼女はぶっきらぼうに答える。でも、関係ないとはなんだ。

「あのなあ、加納さん。俺に一体何をして欲しかったんだよ」

「そんなこと知らないわよ。それに、私の名前は加納なんて名前じゃないわ」

「——はい?」

やっぱり彼女は俺をからかっているだけなのか？ やっぱり二重人格の物まねとか……。ああ、だから忘れろなんて言ったのか。でも、もしそうだとしたら、加納さんは相当の不思議ちゃんってことだよな。

クラスメイトの、知ってはいけない一面を垣間見てしまった。しょうがない。とりあえず、のってやるか。

「お嬢様。失礼ですがお名前は？」

俺が少々おどけて名前を聞くと、加納さん？ は、不機嫌そうに腕を組んで言った。

「あや」

「一緒じゃねーかよ！」

なんだよそれ！ 散々からかっておいて、そこは変化しないのかよ！

「何よ。一体何が一緒なのよ」

「何が？ じゃねーよ！ 結局は綾なんだろう！ 結局お前は加納綾なんだろう！」

「――ああ。そういうば、あの子の名前も、あやだったわね」

忘れてた。と言わんばかりに加納さんは言った。

なんだか気になる言い方だけど、結局は同じ『あや』なんだろうが。

「あ。言っておくけど、私のあやって漢字は、糸って字に、なんか

右側がぐちゃぐちゃしたヤツじゃないわよ？」

「み、右側がぐちゃぐちゃしたやつ？」

もしかして、↓綾の事？

「そう、それよ」

「いや、そこはもっと言い方あるだろ。せめて陵の右側のやつとか、いろいろ言い方あるだろ！」

「いや、あんたの例え方も、人のこと言えない気がする……」

「う、うるさい！」

説明するのも、説明されるのを聞くのも、俺は苦手なんだよ。

「で、どうやって書くんだよ。お前の字」

「亞○ネルの亞に、月夜の夜、で、亞夜」

「その例え方にも、いろいろ無茶があるよな！」

俺が亞○ネルを知らなかったら、一体どうするつもりだったんだよ。

「――にしても」

俺は携帯のメモ帳に、その通りの字を打ってみる。

――亞夜――

「かなり不吉なことが起きそうな名前だな」

「うるさいわよ！ 気にしてんだから言わないで！」

烈火の如く怒る亞夜。でも、そこまで怖いわけでもない。なんだか、小さい女の子を相手にしている気分だ。

「でも、加納さんじゃないなら、お前は一体――」

何者なんだ？　そう問おうとした時だった。

「見つけたぞ！　高野龍弥！」

俺の声をかき消したのは、鬼のような形相をした、美少女保護団体とか言う奴らだ。屋上の扉を思い切りぶち開けて――って、鍵したはずなのに、どうやって入ってきやがったんだ！？

俺が驚きのあまり口をあぐり開けていると、俺の疑問に気が付いたのか、一人の男が前に出て、にひると口を歪めた。

「ふんッ！　この生徒会副会長の須藤武人の前には、校内のいかなる密室であろうと無意味ッ！　生徒会の権限の下、俺は合鍵と言う万能ツールを公式に借りることができるのだ！」

「それを貸した先生は、きっとお前がそんな奴だとは思ってもないんだろぅな」

呆れ気味に俺は言う。目の前の光景に俺は思わず、ここが県内でも有数の進学校であることを忘れてしまいそうだった。

しかし、そんなプライドなど、そこらの飼犬にでも食わせておけ。とでも言いたげなほど、目の前の連中は嫉妬の感情に囚われているようだった。

血走った眼の少年が、一步前へと出て俺に宣言する。

「貴様なんぞに、加納さんを渡すわけにはいかない！」

「別にお前達の所有物ってワケでもねーだろ」

俺がそう言うと、涼しい顔をしていた亞夜が不機嫌そうな顔をし

て割り込んできた。

「そうよ。私はコイツの所有物なんかじゃないわ！」

そうだ。亞夜、もっと言ってやれ！

「コイツが私の所有物なのよ！」

「そうだ！ 俺は亞夜様の所有物だ——って」

「「はああ！？」」

俺と保護団体達が一斉に叫ぶ。

「そうよ。ねえ？ 下僕？」

「誰が下僕だ！ 不思議女！」

「そ、そんな、加納さんの所有物なんて、なんて羨ま……いや、ゲスな発想だ！ 彼女が可愛そうだろう！」

「おい！ 今一瞬思考が漏れてたぞ！」

「う、うるさい！ 羨ましいんだよこの野郎！」

俺が指摘すると、団体構成員Aは突如叫びながら、懷からハサミを取り出して、それを逆手に構える——って、それで何を斬るつもりだ？ 逆手に持ったら、紙も切れませんよ？

「落ち着け藤元。ここは俺達が——拔刀隊、前え！」

構成員Bが叫ぶと、剣道部だろうか。大男達6人が腰に付けていた竹刀と木刀を持って、俺と亞夜に立ちはだかるように向かった。ここ、本当に有名な進学校なのか？ だんだん不安になってきたぞ。

そう思った矢先、大の男達が俺に向かって、同じ台詞を叫びなが

ら一気に襲いかかる。

「「「死ねええええ！ 高野龍弥あ！」「」「」」」

「お前達の目的は美少女の保護じゃないのかよ！」

思わず叫ぶ。だが、俺は眼前に迫る相手の、その抱擁しきれるとは思えないような深すぎる悲しみと、熱く燃えたぎる灼熱のような怒りに、思わず呼吸するのさえ忘れた。

連なる怨嗟の声。地獄から這い寄ってくるかのような深い憎しみが、俺の目の前に立ちはだk——って！ 俺は一体何に襲われてるんだよ！

大体、剣道部6人の攻撃を全部避けることなんで出来ないぞ！
帰宅部を舐めるな！

マズい。やられる！

「くっそお！」

木刀の一撃に晒されると思い、俺は思わず歯を食いしばって、目を瞑ってその一撃に備える。しかし、その一撃が俺を襲うことは無かった。

「っは！ 楽しそうなことしているじゃない。私も混ぜてくれない？」

亜夜が、いつの間にか掠め取った木刀で俺へ向かう一撃を受け止めていたのだから。

「あ、亜夜！」

「勘違いしないでよね。私は、別にあなたの為にやったわけじゃない

いんだからね」

「……………」

亞夜って、実はツンデレなのか？

「って、一度言ってみたかったのよね」

「演技かよ！」

俺のツツコミと同時に、亞夜は相手の木刀を押し返す。でも、亞夜も所詮は素人だ。剣道部6人は、亞夜がどうにかできる相手じゃない。ここは、とにかく逃げた方が……

そう思っていた俺は、この後の光景に目を疑った。

亞夜は、次々に剣道男達を倒していった。さながらバトル漫画のように、襲いかかってくる敵を鮮やかな剣技で圧倒していく。

そして、気が付いたら剣道男達は全員地に伏していた。

「く、くそお！ 加納さんがあんなにお強いなんて聞いてないぞ！」

隊員Aが叫ぶ。

「どうしたの？ まだやる気？」

亞夜が目を鷹のように細める。その威圧感は、まさに本物だった。すると、構成員Aは逆手に持っていたハサミを落として、がくがくと震え始めた。

蛇に睨まれた蛙。とは、このことを言うのだろう。

構成員Aは、他の仲間を引き連れて脱兎の如く屋上から逃げ出した。ようやく静かになった屋上で、亞夜はようやく持っていた木刀を地面へ放り投げた。

「なんだ。つまんないの」

亞夜はつまらなさそうに呟く。そんな彼女に、俺は思わず圧倒された。

素人だと思っていたが、まさか、加納さんにこんな特技があるなんて。人は見かけによらずってやつだ。

で、そんな光景を見て俺が思ったこと。

「――最近の女子高生の間では、剣術やら格闘技が流行ってるのか？」

「……なにそれ。私がそんなもの習っているように見えるの？」

いや、見えないけど。でも、なんでだろうか。優花といい、恵里香といい、拳げ句の果てには儚さそうに見えた加納さんでさえ、こういうキャラクターだったとは。

「いや、おそらく、俺の周りが異質なんだなあ」

と、俺の中でしみじみと納得する。燕。お問が言うところの美少女トライアングルは、実のところ武術家トライアングルである確率が非常に高いぞ。気をつけろ！

と、頭の中で親友に励ましの念を送っていると、亞夜は青空を見上げて、呟くように語り始めた。

「……異質、ね。あなたが言っていることは間違っちゃいないわ。確かに私は異質で異常。普通と普遍はあの子の領分よ。私にとって、それは優先順位の下位でしかない。この世の人間が言う普通は、私にとっては異常でしかない。高野君との会話がいまいち歯がゆいのも、そのせいだろうし」

「――？」

……ナニソレ。本当に不思議ちゃんというか、変なヤツだ。そんなこと言われても、俺は返答に困るだけなんですけど。

「な、なんだよ。その小説のモノローグみたいなの」

そう言ってやると亞夜は、はっと顔を上げる。どうやら無意識だったようで。

「う、ううん。何でもない」

そう言って、亞夜はそっぽを向く。けど、本当に仕草と声、そして今の表情はとっても可愛い。なんというか、そっぽを向いていても、からかいたくなるような、そんな可愛さだ。

まあ、やったら殺られるのは目に見えているけどね。

「あなたとは、また会うことになりそうね」

唐突に、亞夜はそんなことを言った。

「は？ 何言ってる――」

いるんだ？ 俺はそう言おうとした。けれど、その言葉を投げかけた時には、既に亞夜は屋上の扉に手を掛けていた。

亞夜の背中で、ふわりと、一本の黒い尻尾が踊る。

「おい！ 待てよ亞夜！」

そう言うと、亞夜は少しだけ立ち止まり、しかしこちらを向かず、

「できれば、もう二度と私を思い出さないで」

それだけ言って、彼女は階段を降りていった。

亜夜が最後に残した言葉。俺には、その言葉の意味が分からなかった。それを問おうにも、彼女の姿はもうない。彼女が去った扉からは、昼休みの喧騒と言う名の現実が、その奥からその存在を知らせているだけだった。

もう、昼休みが終わる。

屋上には、俺だけがぼつりと取り残される。

「いや、俺だけじゃない」

そう、ここには俺以外にも人がいる。俺はそれを確認して、それから何事もなかったように屋上を後にする。

そう、俺は立ち入り禁止の屋上で気絶する6人の剣道男達なんか見ていない。

断じて見ていない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3465z/>

一条探偵事務所へようこそ！

2012年1月12日22時58分発行